梓弓

昔、男、片田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて別れ惜しみて行きにけるままに、三年来ざりけれ
ば、待ちわびたりけるに、いとねむごろに言ひける人に、今宵会はむと契りたりけるに、この男来たり
けり。「この戸開け給へ。」とたたきけれど、開けで、歌をなむ詠みて出だしたりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

と言ひ出だしたりければ、

梓弓ま弓槻弓年を経て我がせしがごとうるはしみせよ

と言ひて、往なむとしければ、女、

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにしものを

と言ひけれど、男帰りにけり。女、いとかなしくて、後に立ちて追ひ行けど、え追ひつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、指の血して書きつけける。

あひ思はで離れぬる人をとどめかね我が身は今ぞ消え果てぬめる

と書きて、そこにいたづらになりにけり。

（第二十四段）